

細田和江



ロニット・マタロン
(Ronit Matalon, 一九五
九―二〇一七年)。イ
スラエル、テルアビブ
近郊のガネイ・ティク
ヴァ出身のユダヤ人作

家。両親はエジプトからの移民。大学卒業後は
ハアレツ紙の記者として一九八七年から九三年
まではパレスチナの占領地域を担当、当時第一
次インティファダが勃発し、混乱の最中にあ
ったガザを中心にヨルダン川西岸などでも取材
を行った。後に作家に転身し、ハイファ大学や
テルアビブ大学で教鞭をとる。二〇一七年十二
月、癌によって五八歳という若さで死去した。

ロニット・マタロンは人気作家であったと同
時に活動家としての顔も持っていた。ガザでの
取材経験や自らの「アラブ」アイデンティティ
を背景として、多くのメディアでイスラエルの
「アラブ」、「女性」に関しての論陣を張った。
例えばル・モンドのインタビューなどで、イス

ラエルがアパルトヘイト状態で民主的な性質を
失っていると、政権を批判することもあった。

本作「写真 (Ha-Tasom)」が収録されて

いる『祖国の中の異邦人 (Zarim ba-bayit)』
(一九九二年)は彼女の本格的なデビュー作で
ある(実際のデビューはティーン向けの小説『蛇
の葬式で始まるお話 (Sipur she-mutil bi-levayah
shel nahush)』(一九九八年))。彼女の作品の主
役は自分と同じミズラヒーム(中東諸国出身の
ユダヤ人)である。マタロンは、ミズラヒーム
の支援に身を投じて家族を顧みなかった父と、
三人の子を養うために苦勞した母との個人的な
思い出が自分の執筆の原動力だと語っていた。

彼女の名を一躍有名にした長編『私たちが直面
していること (Ze'im ha-panim elenu)』(一九九五
年)、『私たちの足音 (Kol se'adenu)』(二〇〇八
年)は、イスラエル社会の底辺で生きるミズラ
ヒーム女性の生に焦点がおかれている。特に『私
たちの足音』は、自伝的な側面を持ち、生きて
行くために二つの仕事を掛け持つって働く母親を
その娘の視点から描いた。また同じく長編の『サ
ラ、サラ (Sarah sarah)』(二〇〇〇年)では、
結婚生活の破綻、同性愛、母性愛など様々な愛
の形を、パレスチナの抵抗運動に没入するユダ
ヤ人女性活動家を中心とした人間関係の中で表
した。二〇一七年には中編『そうして花嫁は
ドアを閉めた (Yeha-kalah sagrah et ha-delet)』

(二〇一六年)でイスラエルの権威ある文学賞
の一つ、ブレンネル賞を受賞した(受賞が決まっ
たのは彼女の死の前日であった)。

今回訳出した「写真」は、第一次インティ
ファダで犠牲になったパレスチナ人の友人宅
を吊問に訪れる「私」の物語である。もしかす
ると動乱のさなか、ガザで取材を行ったマタロ
ン自身の経験なのかもしれない。しかし物語で
そうした背景が説明されることはなく、その友
人の死の経緯も詳しく語られることはない。読
者は読み進めていくうちに、「私」の吊問が、
同時に事件の取材の側面を持つことに気が付
く。断片をつないだような物語の間に哲学的な
問いが脈絡もなく挿入されており、訳出には相
当の時間を費やした。

マタロンは作品の執筆において、物語を「可
視化」することを意識していたといわれている。
ガザでの取材時の経験で、マタロンは写真
が持つ力が絶大であると痛感した。そこで彼女
は「写真」用いて視覚的な物語を描こうと試み
た。同時期(一九八八年)にイスラエルでロラ
ン・バルトの写真論『明るい部屋 (La chambre
claire)』(一九八三年)が出版されたことが、
彼女の創作に影響を与えたと分析する研究もあ
る。本作にもいくつかの写真とそこに投影され
た死が提示されている。「私」が友人として訪
れた故人の家で、手に入れようとしたのは血に

パレスチナ人の「声」が響き続けるだろう。

まみれた死体の写真ではなく、彼の生きた証としての写真である。つまりモノである写真自体の「生死」が存在するのである。また、「私」は友人の家の壁に死んだ男の顔の幻影を見、夫とともに亡くなったアメリカ人の新妻の家で部屋に飾られた聖母子像に女性の幻影を見出していた。

マタロンは小説の中で写真やイメージを「描く」ことに繰り返し挑んでいた。本作のモチーフとなったガザで対面した死については、文学作品だけではなく二〇〇一年に発表したエッセイ集『読み書き (Kero u-kheto)』でも扱っており、彼女にとっては忘れがたい経験として刻まれていた。

市井のパレスチナ人や中東諸国から移民してきた女たちを、傍で「観察」し、その苦悩を共有し作品として昇華したマタロンは、やはり『エジプト小説 (ha-Roman ha-Misri)』(二〇一五年)で自らの出自をなぞったような作品を発表したオルリー・カステルブルーム(一九六〇年―)と並び、イスラエルを代表する女性作家となった。彼女の死後、書きかけだった中編『雪 (Shaleg)』(二〇一九年)が未完のまま出版されたものの、作家として円熟期に入ったところで突然この世を去ったマタロンが新たな作品を紡ぐことはない。けれども、彼女が発表した作品の中には、彼の地の女性たちやミスラヒーム、